

熊本県におけるトマトハモグリバエの発生状況

鶴田伸二・岩本英伸・古家 忠¹⁾・古賀成司 (熊本県病害虫防除所・¹⁾ 熊本県農業研究センター)

Shinji TURUTA, Eishin IWAMOTO, Tadashi FURUIE and Seiji KOGA :

The Occurrence of Tomato leaf miner (*Liriomyza sativae* BLANCHARD) in Kumamoto Prefecture

トマトハモグリバエ *Liriomyza sativae* BLANCHARD は、1999年に山口県において日本で初めて発見された後、西日本の数府県でその発生が確認された¹⁾。熊本県においても、筆者らは2000年5月に初発生を確認した。そこで、県内における発生状況を把握するため、調査を実施したのでその概要を報告する。報告に当たり、同定をお願いした農林水産省横浜植物防疫所調査研究部並びに鹿児島大学農学部病害虫制御学講座坂巻祥孝博士、さらに、調査に御協力いただいた方々に厚くお礼申し上げる。

1. 調査方法

2000年6～10月に、県内の各種野菜産地40地点において、本種の発生の有無とハモグリバエ類個体数に占める本種の割合を調査した。なお、トマトの場合、平坦地域の冬春作産地では6月に、中山間地の夏秋作産地では8月に発生個体を採集した。採集は、地点により、成虫、蛹、幼虫の中で採集が容易なステージで行い、蛹や幼虫は、室内で飼育し羽化した成虫を識別に供した。

ハモグリバエ類の識別は、成虫の頭部にある外頭頂剛毛の着生部の色や、胸部背面黒色部における光沢の有無を実態顕微鏡下で観察し、岩崎ら¹⁾の方法に従って行った。

2. 結果および考察

1) 県内における発生状況

県内の野菜産地40地点において調査した結果、県内全域に及ぶ33地点で本種の発生が認められた。本種の発生が確認された作物は、トマト、ナス、キュウリ、メロン、スイカ、カボチャ、インゲンの7作物であった。

調査地点数が多かったトマトでは、全24地点のうち、県内全域にわたる20地点で本種の発生が認められた。トマトの調査地点毎に、本種がハモグリバエ類個体数に占める割合を4段階に分けると、すべてが本種であったのは6地点、本種が他種に比べて多かったのは11地点、本種が他種に比べて少なかったのは3地点、本種が確認できなかったのは4地点であった(第1表)。このように、本種の分布は県内全域におよび、大半の地点で他種ハモグリバエと混発しているのが確認された。

それら混発地の場合、全ハモグリバエ個体数に占める本種の割合は調査地点によって大きく異なることも明らかにされた。

今回の調査により、県内全域で本種の発生が認められたことや本種の割合が高い圃場も多く認められたことから、本種が熊本県内に侵入してから、既にかなりの時間が経過しているものと推察された。

2) トマトの作型別に見た発生状況

トマトの作型別に比較してみると、冬春作産地の場合、本種が調査個体数に占める割合は調査地点により大きく異なっていた。一方、夏秋作産地では、全10カ所の調査

地点で本種の占める割合が70%を超え、本種が優占種であることが判明した(第1図)。両産地では、採集した時期や気象条件が異なっているものの、本種の優占程度の差異が何に起因するものか判然としなかった。

3) 雑草における発生状況

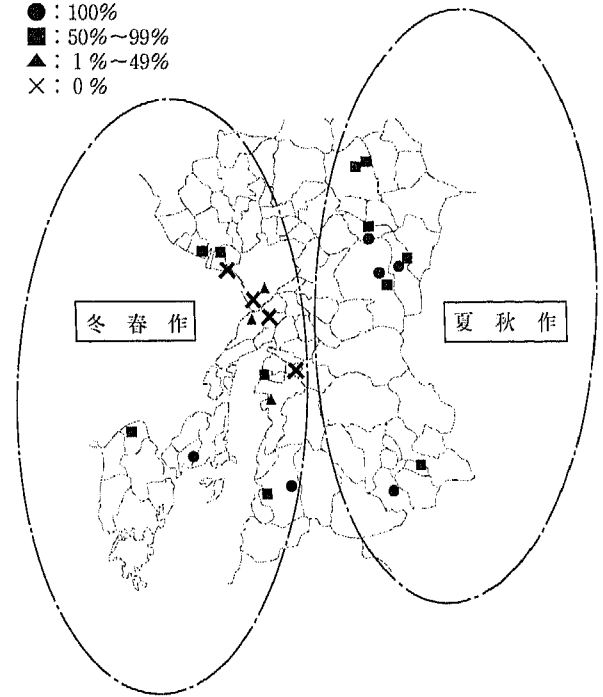
ナス科のイヌホオズキで2地点、キンポウゲ科のケツネノボタンで1地点から本種の発生が確認された。

引用文献

- 1) 岩崎暁生・春日井健司・岩泉 連・笹川満廣：植物防疫 54, 142-147, 2000.

調査個体に占めるトマトハモグリバエの割合

- : 100%
- : 50%~99%
- ▲ : 1%~49%
- × : 0%



第1図 熊本県のトマト産地におけるトマトハモグリバエの発生状況

第1表 各種野菜圃場から採集されたハモグリバエ類に占めるトマトハモグリバエの割合別地点数

作物名	調査地点数	トマトハモグリバエの割合 (%)			
		0	1~49	50~99	100
ト マ ト	24	4	3	11	6
ナ ス	3	0	2	1	0
キュウリ	4	2	1	0	1
メ ロ ン	3	1	1	1	0
ス イ カ	4	0	2	2	0
カボチャ	1	0	0	0	1
インゲン	1	0	0	0	1
合 計	40	7	9	15	9